

図書館

だより 第20号
1991.7.1発行

編集兼発行 三重短期大学附属図書館 514-01 三重県津市一身田中野字蔵付157

〒592
82-2341

目次

- “トルファン古写本展”を見て…………… 田中欣治(1)
自我のアイデンティティまたは私って誰?…………… 岩瀬充自(2)
新規受入図書案内(1990年6月以降受入分)…………… (5)

“トルファン古写本展”を見て

田中欣治(法経科教授)

先頃、名古屋駅前のデパートで西域出土の書蹟を見る機会があった。これは、シルクロードの要衝の地として栄えた中国北西部の吐魯蕃からベルリン博物館へもたらされた文物と、四天王寺百一世管長の所蔵される仏典などを展示したものである。

トルファンは蒙古やカザフ・アフガニスタンに接する新疆ウイグル自治区にあって、地理学的には世界一低い盆地として有名である。また、鈴鹿のマンボとよく似た坎児井の集中する地域であることから、昨年ここを訪れたこともあってなんとなくこの展覧会をのぞいて見た。

私にとって意外であったことは、漢字の名家である中国において、唐代以前には同時代の肉筆の文字の伝世品が皆無とされていたこと、秦・漢・六朝・隋・唐時代の書蹟(その時代に書かれた文字の痕跡)は金属や石に刻まれたもの・法帖(習字の手本)の形で模写し伝えられたものしか見ることができなかったことである。つまり、私達が日常読み書き

親しんできた漢字のお手本は、おおむね清代以降に新しく書かれたり印刷された文字(書風・書影)を眺めていたに過ぎないのであった。

二十世紀初頭、欧米や日本の探検隊が中国の奥地や中央アジアを調査し、吐魯蕃や敦煌の洞窟寺院や古墳などから紙に筆で書かれた書蹟が発見された。その一部分が今回の展示品である。

およそ二千年の昔、漢の武帝の命を受けて張騫が派遣されたのも、西遊記のモデルとされた玄奘三蔵法師がインドに経典を求める旅の途中に滞在して大藏経を講じた高昌国もこのあたりであった。古代中国の文化がようやく伝播しはじめた頃の人々の肉筆が砂に埋もれていた。

この展示会の解説者のひとり藤枝晃先生は私の高校時代からの恩師である。先生の御説によって、今回の展示の紙はおおむね麻紙であり、材料に着古した麻布を用いたらしいこと、書いた筆は今日のような毛筆ではなく木筆を用いたこと、一行毎に罫線の引いてあるのは木簡を並べた名残りであり、その幅は木簡一枚と同じことなどを改めて知った。帰宅して解説書を詳しく読むと、紙で作った本の歴史(書物の形の歴史)を勉強することが出来た。

すなわち、紙が書物として使われ始めた時から巻物（厳密には卷子本という）であった。これをお経のように折り本にして必要な箇所をすぐに捜しだし、読んだあとを巻き戻さなくてもよい発明が成されたのは、およそ二百年も後の八世紀（唐代）の出来事であった。さらに、今日のノートや本のように紙を重ねて綴じて冊子にすることも八世紀のほぼ同じ頃のことであった。

写真は昨年トルファンに近い高昌国時代の都市址である高昌故城址を訪れた際、官庁建物跡としるされた遺構を写したものである。日本では聖徳太子の時代にあたる。此地はその後、安史の乱をへて唐の勢力は衰退し、チベット族やウイグル族が進出し、十一世紀にはイスラム教が伝播した。十四世紀からは吐魯蕃の名で知られるようになった。

自我のアイデンティティまたは私って誰？

岩 瀬 充 自（法経科教授）

人間は、鏡をもって生まれて来るわけではない。だから、自分が一体どんな人間なのかということ、実は、本人が一番知らないことがあるが、不思議なことではない。本学の学生と話していると、自分がどんな人間なのかのイメージを、両親や友人が自分に与えた評価から形成している場合が多い。例えば、両親から「あなたはそっかしいのね」などとよく言われると、「そうか、私ってそっかしいのか」と了解して、私はそっかしい人間であるという、セルフイメージをもつのである。

人間は、鏡をもって生まれて来るわけではない。顔かたちや外見に関しては、人間は、本物の鏡に自分の姿を映してみることによって、ある程度まで、自分の外見を知ることができる。ある程度まで、と言うのは、自分の外見に関する評価も、他の人との比較や、他の人の意見に左右されて形成されるからだ。例えば、「あなたは太っているわね」などはっきり口に出して言われなくても「僕はスリムな人が好きだな」などと、友人が言うのを聞いて、「そうか、私は太めなんだな。もっとダイエットしなくちゃ。」などといった、

セルフイメージをもつのである。恋人に「君の口元ってとてもチャームポイントだね」なんて言われると、昨日まで犬嫌いだった自分のくちびるが、突然、チャームポイントに豹変することだってある。

まして、自分の性格や性質については、鏡はない。性格判断テストなどが市販されているし、雑誌などにもよく載っているが、性格判断テストなどは繰り返し練習すると、性格の弱点と考えられていたものを克服してしまいうることができる。要は、「正しい答」を覚えてしまえば良いからである。

そうすると、一体、人間はどうやって自分の性格をセルフイメージしているのだろうか。実は、答は全く簡単で、他の人間とのコミュニケーションを通して自己のイメージを形成しているのである。

「人間は、鏡をもって生まれて来るわけではない」という言葉は、実はフィヒテの哲学の核心部分についてのマルクスの有名な批判である。人間はこの世に生まれ落ちた瞬間から～正確に言えば、母胎内にいるときから～母親とコミュニケーションしているのであり、家族の一員として、父親や兄弟・姉妹やおじいちゃん・おばあちゃんとコミュニケーションする。コミュニケーションは授乳であったり、だっこしてもらったり、おむつを替えてもらうことから身振り言語や、本当の言語によるコミュニケーションにまで及ぶ。人間は、コミュニケーションによって、はじめて、人間になるのであり、性格が形成されるとともに、セルフイメージも、形成されるのである。

「人間は、社会的動物である」とアリストテレスが言ったということになっているが（正確には、ポリスの動物、つまり、都市国家に住んでいる動物であると、言ったのだが）、社会性と言うのは、抽象的なことを言っているわけではない。

社会性とは、具体的なものであり、最初は家族、そして幼稚園や保育園、学校における人間関係や友人関係におけるコミュニケーションをさしている。これらの人間関係の中で、個人の性格が、従って個性が形成されるとともに、セルフイメージも形成されるのである。

二、近代西洋の哲学や心理学は、個人の主体性

を強調するあまり、コミュニケーションを通して、対人関係において、自己が形成され、セルフイメージも形成されることを、見落としてきたことは、否めない事実である。日本を占領したアメリカ合衆国のマッカーサーが、「日本人の精神年齢は、小学校高学年程度である。」と言ったという事実は、アメリカ人やヨーロッパ人にとって「自立」の神話が、ステレオタイプ化した俗説にまで成っていたことを示している。というのは、マッカーサーが心理学の研究者であったとは思えないからである。同様に、「集団主義」の日本人論も、日本人についての皮相な観察の産物に過ぎない。また、「日本の自我」は弱いと言った主張や、「甘えの構造」なる主張も、実は、アメリカ人の文化的脈絡から日本人の特性を捉えようとした短絡的な議論に過ぎない。

日本人は、お互いに相手を尊重するためには、というのは礼儀の問題であるが、自己主張を強く押し出したり、肯定・否定をはっきりさせてはならない、と考えている人が多いからである。ちなみに、私が客員教授をしていたドイツでも、やはり礼儀の問題として、自己主張をはっきりとすること、肯定・否定をはっきりさせることは大切なことと考える人が多かった。

マッカーサーの発言は、マッカーサー自身の生活経験と、そこで培われてきた文化の体系を反映している。つまり、マッカーサーが属していた文化的価値体系の尺度で計ってみると、多くの日本人が彼に対してとっていた態度は、アメリカ白人の小学校高学年の児童が示す反応と良く似ていたのである。

話を元に戻すと、本稿のタイトルは「自我のアイデンティティまたは私って誰？」である。そして、これまでのところ、どうも個性が対人関係によって、コミュニケーションの中で形成されることと、セルフイメージ自身がコミュニケーションの中で形成されることとが、主張されている。そのうえで、対人関係が、共通の文化的価値体系を背景にしていることが分かる。

このように考えて来ると、文化的価値体系の共通性というものが、個性、すなわち、その人の特有の性格を形成するうえで、決定的

な意味をもつのではないかと考えられる。個人間の文化的価値体系の共通性の最も基礎をなす集団が、家族である。だから、個性は、ひとまず、家族の中で形成されるのである。家族の人間関係は決して単純ではなく、実は大変複雑なものである。しかし、文化的価値意識は、以外と共通していることによって、子供の個性が形成される。」
従って、子供の個性の第一の核は、家族の価値意識によって決定される。もっとも、自然科学的な決定論が言うように、因果的・一義的に決定されるわけではない。家族関係の核になっている価値体系を土壌にして、さまざまなコミュニケーションを通して、個性が育つのである。

諺に、「総領の甚六」というのがあるが、かく言う私も長男の甚六なのだが、兄弟・姉妹の中で置かれている位置によっても、個性差がでて来るし、ひとりっ子の個性もある。また、核家族の中で育つか、3世代家族の中で育つかも、個性の形成に関わってくる。自我のアイデンティティとは、まず、家族の文化的価値意識の共通性を基盤として形成される。だから、子供の自我のアイデンティティは、家族なのである。ということは、幼児期の子供が、厳密な意味での自我を持っていないことを意味している。

フィヒテの意味での自我のアイデンティティ、つまり、精神的に自立した大人のアイデンティティは、後になって形成されるものである。同時に、大人のアイデンティティの対象も、自己に限られるわけではない。文化的価値的に共通するものとして、共感・嫌悪できる対象、愛し、憎む対象も、アイデンティティの対象となる。大人にとっても、共感と愛情の対象は不可欠であり、共感と愛情の対象を持たないことは、自我のアイデンティティの危機や崩壊をまねく。

だから、恋人や家族や学校での友人がアイデンティティの対象となり、クラブや母校がアイデンティティの対象となる。「企業戦士」にとっては、企業もアイデンティティの対象なのである。同様に、キリスト教を信じていれば、神がアイデンティティの対象となるし、イスラム教を信じていれば、アラーがアイデンティティの対象となる。

四、

人間は様々な人やものやシンボルをアイデンティティの対象とすることによって、自我のアイデンティティを確立する。そして、この構造を見失うと、フィヒテのように、精神的自立性の側面のみを強調することになる。

精神的自立性は、確かに重要な普遍的価値を、すなわち成人という観念に含まれている。同時に、自我のアイデンティティは、自分以外の人間を中心とする様々なものとのアイデンティティによって、はじめて可能になることをフィヒテは捉え損ねている。

自立性としての自我のアイデンティティは、ちょっと考えると逆説のようにも思えるが、愛着や愛情や尊敬や崇拜の対象があって、はじめて可能になる。そしてそれは、シンボルであっても構わない。例えば「自由・平等・友愛」と言ったシンボルでも良いし、民族のアイデンティティの象徴としての国旗や国歌であっても良い。

私の滞独中に、サッカーのワールドカップがイタリアで開催された。このときはドイツチームが優勝したが、西ドイツの国内全体が異様な興奮に包まれた。私の住んでいた街でも優勝の瞬間に、若者が国旗を振り回し、クラクションを鳴らしながら街中を走り回り、優勝に酔った市民達が広場に集まって明け方まで大騒ぎであった。私の息子もドイツ国旗を持って広場に駆けつける始末であった。テレビもベルリンをはじめとする各地のどんちゃんさわぎの様子を放映した。当時大忙し（ドイツ統一問題のために、文字どおり東奔西走の日々であった）であったコール・ドイツ首相も、優勝の試合には観客の一人としてローマのサッカー場におり、テレビも、ほんの2秒ほどだが、首相が観戦していることをアピールしていた。

ここで先ほどの話に戻ってみよう。私は、文化的価値意識の共通性が個性を形成するための決定的契機であると主張した。文化的価値意識の共通性を持った集団・グループは、自我のアイデンティティを支える基盤である。そのうちのいくつかのものを、既に上で述べたが、民族もそのうちのひとつである。なぜなら、共通の言語を持ち、「言葉の壁」無しにお互いに理解し合える最大の単位が、民族にほかならないからである。従って、愛国心

は、正確には、自民族を愛する心は、この言葉の共通性に基づく文化的価値意識の共通性をもつ集団を、自己のアイデンティティの対象にすることにほかならない。愛国心を持つことは、ごく自然な人間の基礎感情の一つにほかならない。だから、オリンピックで日本の選手が優勝したときに、そして日の丸が掲揚されたときに、私達が感動することは、自然な感情である。

これに対して、「日の丸」反対を叫ぶ人たちは、第二次世界大戦の時の侵略のシンボルとして「日の丸」をイメージしている世代の人たちなのである。私達は侵略戦争をしてはならないのは当然の事であり、彼らが「日の丸」を侵略戦争のシンボルとして理解している限りでは、彼らの心情を理解できるし、彼らに対しても寛容な立場を示すのが良いであろう。なぜなら、彼らも同じ愛国心から出発しているからである。もっとも、自分の見解を押しつけないと言う条件つきで。

しかし、「愛国心のみを自我のアイデンティティの対象にすべきだ」とする人々の主張は危険なものであるし、自我のアイデンティティについての理解も正しくない。これまで述べてきたように、自我のアイデンティティの対象は色々あり、多くの人は様々な対象を、同時に、自我のアイデンティティの対象としているからである。

「愛国心のみを自我のアイデンティティの対象にすべきだ」という主張には、愛国心のみを自我のアイデンティティの対象にしない人びと〜これが普通であるが〜に対して、自己の主張を強制しようという、うさんくささがつきまとっている。もしも、このような主張を強制する体制が成立したら、思想と良心の自由が奪われることになるから、私たちは、正当にも、このような体制を独裁制度とかファシズムと命名することになるだろう。もっとも、日本ではこのような体制が成立する可能性は、当面ありえない。なぜなら、民主主義的議会制度が曲がりなりにも作動しているし、愛国心の押売は少数派だからである。

最後に、自我のアイデンティティの対象として、地球の問題と、地方語（俗に方言と呼ばれるが、私は、東京地方の言葉も、東京方言と思っているので、地方語というタームで

新規受入図書案内

(1990年6月以降受入図書)

総記(000)

(岩波新書)

統一する)の問題に触れておきたい。

今日、多くの若者が、環境問題に関心を寄せ、第三世界の人々の飢餓に悲しみを感じていることは、大切なことである。海外青年協力隊員として、第三世界に行っている若者達こそ～たんなる旅行者・観光客達と違って～日本と第三世界との、真の友好の架け橋である。

多くの若者が、たんに自民族を愛しているだけでなく、ほかの多くの民族を、同じ人間として愛し、共感できる感性を身につけていることに、私は希望を見いだせると思う。

次に、地方語の問題について。

例えば、北海道の「しばれる」という言葉は、有名になったが、-10℃とか、-20℃とかの体験をしなければ、実感は分からない。

同じように、関西の人を怒らせるには、「バカ」と言えばよいし、関東の人を怒らせるには「アホ」と言えばよい。「馬鹿」という関東語のもっている多様なニュアンスを、関西人は理解しにくい。同様に、「あほ」という関西語の多様なニュアンスを、関東人は理解しにくい。

これらの事からでてくる結論は、同じ地方語を話す人々は、同じ地方語を話す人々を自我のアイデンティティの対象としているし、他の人々は、その事を尊重すべきであり、尊大な態度をとってはならないし、差別するのはもってのほかだろうということであろう。

批判的に言及した文献

南 博 著『日本の自我』岩波新書
土居 健郎 著『「甘え」の構造』弘文堂

おすすめできる本

石田 春夫 著『セルフ・クライシス』講談社現代新書
青木 保 著『「日本文化」論の変容』中央公論社

男だって子育て	広岡 守恵
豊かさの精神病理	大平 健
山への挑戦	堀田 弘司
短編小説講義	筒井 康隆
憲法と天皇制	横井 耕一
国際協力の新しい風	中田 正一
障害児と教育	茂木 俊彦
ディズニーランドという聖地	能登路 雅子
市民と援助	松井 やより
色彩の心理学	金子 隆芳
フィルハーモニーの風景	岩城 宏之
痛みとのたたかい	尾山 力
中国大陸をゆく	天児 慧 他
地方からの発想	平松 守彦
続日本人の英語	マーク・ビーターセン
老いと健康	吉川 政巳
地価を考える	都留 重人
アメリカの環境保護運動	岡島 成行
教科書と裁判	森川 金寿
異郷の昭和文学	川村 湊
岩波ブックレット	
ほんどうの自由社会とは	樋口 陽一
ハンドブック 東欧諸国	南塚 信吾
学校と日の丸・君が代	山住 正巳
ぼくはマッド・チャイナマン	篠崎 弘
アジアから見たナガサキ	秋月 辰一郎 他
ピロード革命のころ	バーツラフ・ハベル
キーワードでよむドイツ統一	永井 清彦
皇室報道の読み方	亀井 淳
国鉄改革と人権	鎌田 慧
個人と国と国際と	犬養 道子
死刑廃止を考える	菊田 幸一
植民地朝鮮の残影を撮る	中野 茂樹
寅さんの人間論	山田 洋次
とり戻そう東京の水と池	森 まゆみ
対談キャリアと家族	マーガレット・ドラブル
新・学問論	西部 遺
Lotus 1-2-3による科学計算フォーム集	
	長谷川 勝也 他
メディアの熟成	野崎 茂
ライフゲームの宇宙	
	ウィリアム・パウンドストーン
Lotus 1-2-3による経営分析システム	
	上山 義尚
図書館年鑑1990	日本図書館協会
著作権と隣接権	ローランド・コロンベ

音楽著作権の歴史 P・h・バレス 著
宮澤 博明 訳
岩波書店
補訂版国書総目録5・6
出版年鑑1990年版 出版ニュース社
雑誌・新聞書誌解題 総務部人事課
日本の白書平成2年 日本情報教育研究会
日本書籍総目録1990 日本書籍出版協会
世界なぞなぞ大事典 柴田 武 他
心のありか 村上 陽一郎
生かしあっているのち 久保 克児
青鞥明治44年~大正5年 青鞥社
モノ誕生「いまの生活」1960~1990

時事年鑑1991 時事通信社
世界年鑑1990 共同通信社
中国年鑑1990年版 中国研究所

哲 学 (100)

コンサイス20世紀思想事典 三省堂
遊びと人間 R・カイヨウ 著
清水 幾太郎 他訳
いま自然をどうみるか 高木 仁三郎
真理・証明・計算 内井 惣七
仁学 譚 嗣同

Kritische Theorie und Weltveränderung
W・Würger

野生人とコンピュータ ジャン=マリ・ドムナック
Knowing and History
Michael S. Roth

老子の講義 諸橋 轍次
行動と体験 中原 淳一
心理学アスペクト 関 忠文
行動科学ハンドブック 吉田 淳也
生き方の心理学 梶田 叙一
子どもの発達をさぐる 小嶋 秀夫 他
青年の心理を探る 久世 敏雄

社会の中の人間 原岡 一馬 他
組織の中の人間 原岡 一馬 他
動人物 日高 敏隆
視覚の文化 小町谷 朝生

暗黙知の次元 マイケル・ボラニー 著
利島 保
認知の神経心理学
知覚の心理学 D・W・ハムリン 著
吉岡 一郎 訳

誰のためのデザイン? D・A・ノーマン 著
野島 久雄 訳
動物の認知学習心理学 J・M・ピアース 著
石田 雅人 他訳

パッケージ・性格の心理1~6 柏木 恵子 他

生涯発達心理学の課題 村田 孝次
行動の発達を科学する 荘厳 舜哉
カウンセリング辞典 國分 康孝
臨床心理士になるために

現代人と愛 ロバート・A・ジョンソン
長田 展 訳

対人不安 M・R・リアリィ 著
生和 秀敏 監訳

心理治療法ハンドブック 伊藤 隆二
状況倫理 J・フレッチャー 著

実存哲学と倫理学 H・フターレンバッハ 著
中里 巧 他訳

人生の探究としての倫理学 河野 真
現代英米の倫理学 岩崎 武雄

現代倫理の課題 関西倫理学会
日本思想史 新保 哲

解放の神学とラテンアメリカ
フィリップ・ベリマン

歴 史 (200)

人間と自然界 キース・トマス 著
中島 俊郎 他訳

フロイス日本史1~12 フロイス 著
松田 毅一 他訳

国史大辞典にたへひ 吉川弘文館
徳川時代からの展望 速水 融 他

近代日本史の新研究Ⅷ 手塚 豊
大正デモクラシーの群像 松尾 尊兌

安保と高度成長昭和35年~38年 講談社
昭和史世相編 色川 大吉

昭和家庭史年表1926~1989 家庭総合研究会

東京を爆撃せよ 奥住 喜重 他著
図説横浜の歴史 横浜市

北勢町の地名 水谷 明夫
名張市史料集 名張市

津市市制施行100周年記念誌 津市
反乱(上・下) メナヘム・ベギン 著

東インド会社 滝川 義人 訳
ドイツ統一について ギュンター・グラス

ふたつの近代 望田 幸男
ベルリンの壁 天使たちの記録 H・Waldenburg

ドイツ民主共和国 本多 勝一
スペイン内戦写真集 逢坂 剛

図翁 遠近道印 深井 甚三
私の自画像 石田 博英

岸信介回顧録 岸 信介

- 三代回顧録 松村 謙三 法的思考とはどのようなものか 田中 茂明
緒方竹虎 緒方竹虎伝記刊行会 法律学への旅立ち 渡辺 洋三
聞書 池田勇人 塩口 喜乙 Une autre justice
大磯随想 吉田 茂 Robert Badinter
裸で生きたい ソニア・リキエル 憲法 杉原 泰雄
資源の地理 浅井 得一 わかりやすい新国籍法 山田 敏一
人間の地理学 浅井 得一 行政法入門(新版) 原田 尚彦 他
文化地理入門 千葉 得爾 家事紛争ハンドブック 有地 亨
地域分析 村山 祐司 民法(改訂版) 川井 健 他
教養の地誌学 杉村 暢二 従業員持株制度 河本 一郎 他
角川日本地名大辞典1~47 竹内 理三 他 差止請求と損害賠償 石田 喜久夫
地図と文化 久武 哲也 民法秩序と自己決定 石田 喜久夫
歴史時代の集落と交通路 藤本 利治 民法 田山 輝明
ドイツ自遊自在 中嶋 隆一 契約の成立と責任 円谷 峻
イギリスとアメリカ 山鹿 誠次 担保・保証の法律相談(新版) 清水 誠 他
不法行為責任の研究 神田 孝夫
失火責任の法理 澤井 裕
一目でわかる改正法例と戸籍実務 企画室編
手形法小切手法 平出 慶道
現代企業法の展開 岩原 紳作
手形決済・不渡の法律紛争 木内 直彦
会社経営者の過失 近藤 光男
会社判例の基礎 倉沢 康一郎
会社法入門 前田 庸
新版 会社法を学ぶ 長浜 洋一
株式会社生態の法的考察 杉本 泰治
会社法(新版) 鈴木 竹雄 他
会社法の諸問題(増補版) 高島 正夫
最新 手形法小切手法 田邊 光政
新版 商法を学ぶ 谷川 久 他
商法略説 第2版 龍田 節
刑法とモラル 金沢 文雄
新訂 刑法事典 木村 亀三
考える刑法 町野 朔
刑法(全) 中山 研一
犯罪学リーディングス 中山 研一
Accidents de la circulation Bergerés
裁判実務大系17 医療過誤訴訟法 根本 久
真実は神様にしかわからないか 後藤 昌次郎
概説刑事訴訟法 山中 俊夫
非行少年はこう扱われる 関 力
少年法(条文解説) 田宮 裕
Procédure Pénale Stefani, Gaston
La Cour d'Assises Vernier
宗教関係判例集成1~8 大家 重夫
自動車事故の責任と賠償 第三版 高崎 尚志
国際条約集 1990年版 有斐閣
国際私法(新版) 石黒 一憲
新しい国際私法 澤木 敬郎
国際私法入門(第3版) 澤木 敬郎
わかりやすい入管法 山田 敏一
- 社会科学(300)
- 社会科学小辞典 古賀 英三郎 著
20世紀文化の散歩道 ダニエル・ベル 著
正慶 正孝 訳
ニヒリズムを超えて 西部 遼
Marx Engels Werke 43
K・Marx&F・Engels
ロシア・インテリゲンツィア史 松原 広志
19世紀ヨーロッパの自由主義
アイリーン・コリンズ
オットー・ギールゲ
中世の政治理論
日本内閣史録1~6 林 茂 他
現代日本の支配構造分析 渡辺 治
吉田内閣 小島 正固 他
ドイツが一つになる 仲井 斌
ソ連現代政治 下斗米 伸夫
憲法政治の転換 小林 直樹
日本の第一回総選挙 R・H・P・メイソン 著
石尾 芳久 他訳
政堂年鑑1948年版 朝日新聞政党記者団
自由党々報1~10 文献資料刊行会
自由党から民自党へ 坂野 善郎
国家と個人 田中 浩
写真報告 サハリンの韓国・朝鮮人 山本 将文
アルザスのユダヤ人 パウル・アサール 著
宇京 早苗 訳
国民と行政 片岡 寛光
自治体における政策研究の実践 田中 明
自治行政と住民の「元気」 大森 彌
都市問題と公共サービス S・ピンチ
新法律学辞典 竹内 昭夫
近代ドイツ官僚国家と自治 北住 炯一
講座国際政治1~5 有賀 貞 他
二十歳の法律ガイド 木村 晋介 他
法規範の分析 井上 茂

- わかりやすい国際結婚と法 山田 鏡一
現代中国経済事典 日本総合研究所
ポケット経済・経営外来語辞典 柏崎 利之輔
新経済用語和英辞典 オリエンタル・エコノミスト
経済要覧 平成2年版 経済企画庁調査局
消費者主義経済論 相沢 安正
地方の経済学 安東 誠一
経済学基本辞典 長谷田 彰彦
入門・経済学 猪木 武徳
経済用語辞典 金森 久雄
現代社会の生活と労働 松原 昭
いま世界政治経済が面白い 西川 潤
出生力の経済学 大淵 寛
ポストケインジアン叢書19・ケインズとケイン
ジアンのマクロ経済学 V・チック著
長谷川 啓之 他訳
証券用語辞典 証券団体協議会
岩波経済学小辞典(第2版) 都留 重人
経済成長論 武野 秀樹
経済発展の生態学 P・G・ウイルクソン
近代資本主義の諸理論 トム・B・ポットモア著
小澤 光利 訳
近代の運命 エドゥアルト・ハイマン 著
野尻 武敏 他訳
資本主義世界経済I・II ウォーラースティン 著
藤瀬 浩司 他訳
経済白書 平成2年版 経済企画庁
日本経済の構造転換 小峰 隆夫
経済発展と日本の経験 大川 一司
日本の構造転換と地域経済 鈴木 多加史
地域経済活性化の道 山崎 充
ソ連の試練 巖峨 冽
立地論読本 脇田 武光
立地論読本II 脇田 武光
ポケット世界経済辞典 早稲田大学世界経済研究会
国際経済(第四版) 渡辺 太郎
現代世界経済論の課題と日本 吉信 肅
適度人口 中山 伊知郎 他
日本の経営 丸山 恵也
図で見る中小企業白書 平成2年版 中小企業庁
現代経営学総論(改訂) 田杉 競
中小企業の財務診断(新訂版) 三苫 夏雄
経営労務の理論と実際 西尾 一郎
財務分析演習(二訂版) 国弘 員人
財務管理入門 村松 司叙
財務管理 西澤 脩
財務管理演習(改訂版) 西澤 脩
現代管理会計の展開 佐藤 精一
会計理論の基礎知識 青柳 文司
財務会計の基礎知識 中村 忠
管理会計の基礎知識 岡本 清
原価計算の基礎知識 津曲 直躬 他
会計監査の基礎知識 高田 正淳
会計測定の理論 黒澤 清
業績評価会計 黒澤 清
- 原価会計論 黒澤 清
資金会計論 黒澤 清
財務諸表の監査 黒澤 清
社会会計 黒澤 清
改訂版簿記I・II・III 武田 隆二
簿記演習 安平 昭二
簿記I(初級編) 簿記II(中級編) 安平 昭二
現代会計の基礎理論 阪本 安一
原価計算総論 溝口 一雄
実際原価計算 佐藤 好孝
標準原価計算 板垣 忠
直接原価計算 小林 健吾
業績管理原価計算 小林 哲夫
意思決定原価計算 豊島 義一
国際金本位制と中央銀行政策 藤瀬 浩司 他
変動為替相場制の理論(改訂版) 奥村 隆平
The Future of Financial Systems and Services Gardener, P.M.
CORPORATE FINANCIAL SERVICES IN WALES 1990 Bricault, G.C.
イングランド銀行金融政策の形成 金井 雄一
アメリカの金融政策 ベンジャミン・M・フリードマン 著
三木谷 良一 訳
スワップ取引(増補版) 小林 靖弘
昭和財政史1~20 大蔵省財政史室
地方財政白書 平成2年版 自治省
'90民力 朝日新聞社
テキストとしての社会リチャード・H・ブラウン 著
安江 孝司 他訳
今日の都市 明日の都市 角本 良平
社会化の心理学ハンドブック 斎藤 耕二
同時代人の生活史 庶民生活史研究会
「別れ」事例 内なる赤穂浪士 藤田 正
競争にみるアメリカ社会の特徴 太田 洋
現代社会政策の基本問題 西村 裕通
日本の企業と外国人労働者 富沢 賢治 他
社会政策制度史論 土穴 文人
過労死と労災補償 岡村 親直
増補 新住居学概論 石堂 正三郎 他
消費生活年報1989 国民生活センター
現代消費生活論 杉田 淳子 他
消費者対応実務事典 消費者関連専門家会議
The Building Society Industry in Transition Drake・Leigh
家計調査年報 平成元年 総務庁総計局
コンシューマリズム(第4版) デビッド・A・アーカー 他著
谷原 修身 訳
消費者教育 第四、六、七、八冊 日本消費者教育学会

- 消費者教育キーワード269消費者教育を考える
 教員交流会
 労働白書 平成2年版 労働省
 ビスマルクと労働省問題 アドルフ・リヒター 著
 労働法講義3 西村 健一郎 他
 注釈労働時間法 東京大学労働法研究会
 新しい産業心理 西川 一廉
 志は高く 赤松 良子
 性差の文化 青木 やよひ
 現代家族の機能障害とその対策 有地 亨
 日本語は女をどう表現してきたか キトレッジ・チェリー 著
 栗原 葉子 他訳
 わかりたいあなたのためのフェミニズム入門 江原 由美子
 モア・レポート NOW モア編集部
 性差別主義と戦争システム ベティ・リアドン 著
 山下 史 訳
 男女両性具I・II J・シンガー 著
 藤瀬 恭子 訳
 ジェンダーの神話 アン・ファウスト・スターリング
 東京の下層社会 紀田 順一郎
 流れよ教育の大河 愛知私教連
 かわる社会かわる教育 天野 郁夫
 仲間たちへの手紙 三上 満
 文部統計要覧 平成2年版 文部省
 笑うきょういく学 岡崎 勝 他
 教育実践の研究 柴田 義松 他
 教育における実存主義と現象学 D・E・デントン 他
 現代日本の階層構造3 教育と社会移動 菊地 城司
 母親の態度 行動と子どもの知的発達 東 洋 他
 教育の心理学 東 洋 他
 親と子のはなし 企画室
 おかあさんの子育て相談室 平井 信義
 おかえりなさい お父さん 平井 信義
 心のめばえにはほほえみを 平井 信義
 心の基地はおかあさん 平井 信義
 心にひびく語りかけ 平井 信義
 聞いてください子どもの本音 品川 不二郎
 ほんの少しのやさしさを 平井 信義
 元気な笑顔がみたいから 鈴木 雅子 他
 学習と教育 無藤 隆 他
 子どもたちへの五つの愛 斎藤 晴雄
 教室の心理学 辰野 千寿
 学校教師のカウンセリング基本訓練 上地 安昭
 日本教育史年表 伊ヶ崎 暁生 他
 階級 官僚制と学校 M・B・カッツ 著
 藤田 英典 共訳
 子どもの人権と教育権 日本教育法学会
 学校文化 長尾 彰夫
 講和後における我が国教育改革の研究 長田 三男 他
 占領下における我が国教育改革の研究 長田 三男
 教員試験基礎演習シリーズ '91年度版 共同教育研究会
 教職実務ハンドブック 教職実務研究会
 子どもを育てる学級づくりの法則 橋本 定男
 楽しい教室づくり入門 有田 和正
 何のための教師 ジョルジュ・ギュスドルフ 著
 小倉 志祥 共訳
 子どもと生きる教師 石川 二郎
 極楽非道の教師論 岡崎 勝 他
 学校をつまづきをどうするか 駒林 邦男
 生徒指導の推進体制に関する諸問題 文部省
 精神的な適応に関する諸問題 文部省
 生徒指導の実践上の諸問題とその解明 文部省
 生徒指導上の問題についての対策 文部省
 生徒理解に関する諸問題 文部省
 生徒の健全育成をめぐる諸問題 文部省
 生徒の問題行動に関する基礎資料 文部省
 問題行動をもつ生徒の指導 文部省
 思春期における生徒指導上の諸問題 文部省
 生徒の健全育成をめぐる諸問題 文部省
 中学校におけるカウンセリングの進め方 文部省
 中学校におけるカウンセリングの考え方 文部省
 意欲的な生活態度を育てる生活指導 文部省
 学級担任の教師による生徒指導 文部省
 中学校における学業指導に関する諸問題 文部省
 子供を動かす法則 向山 洋一
 ゆるやかな集団づくり 大西 忠治
 生徒の説得のしかた 坂本 光男
 進路指導の理論と方法 日本進路指導学会
 講座 進路指導1~3 山口 政志 他
 中学校 進路指導のポイント 全国進路指導研究会
 中学校社会科教育法 朝倉 隆太郎 他
 我国における教育委員会制度の研究 長田 三男 他
 社会科発問づくりの上達法 西尾 一
 たのしくわかる社会科 歴史教育者協議会
 新学習指導要領 中学校 小関 洋治
 社会科指導案づくりの上達法 鈴木 健二
 各国の性教育と薬物教育 沖原 豊 他
 日本人のくらし創(つくる) 秋岡 芳夫
 日本人のくらし木(しらき) 秋岡 芳夫
 日本人のくらし住(すまう) 秋岡 芳夫
 服装の地理 別枝 篤彦
 日本人の洋服観の変遷 家永 三郎
 衣服と装身の心理学 神山 進
 モダン・デザインの礎 吉岡 徹
 自然科学(400)
 数III方式ガロアの理論 矢ヶ部 蔵

やさしいフラクタル 安居院 猛 他
 フラクタルの美 H.O.バイトゲン 他
 位相のこころ 森 毅
 ホモトピー論 A.T.Fomenko
 SASによるデータ解析入門 市川 伸一 他著
 生活統計の基礎知識 大澤 清二
 入門数理統計学 P.G.ホーエル 著
 神は老翁にして アブラハム・バイス 著
 金子 務 他訳
 目で楽しむ量子力学の本 大場 一郎
 エネルギー、環境、生命 鈴木 啓三
 化学語源ものがたり 竹本 喜一
 元素と周期律 井口 洋夫
 分子認識と生体機能 小宮山 真 他
 物理化学I 山口 一郎
 分子と人間 P.W.Atkins 著
 千原 英昭 他訳
 実験で学ぶ科学 峰下 雄
 植物細胞組織培養 原田 宏 他
 目でみる生化学1・2 ベネット 著
 永井 裕 他訳
 生物のケミカルコントロール 須賀原 亮三 他
 脂質の科学 中村 治雄
 プロトプラストの遺伝工学 長田 敏行
 日本海洋プランクトン図鑑 山路 勇
 裸のサル デズモンド・モリス 著
 日高 敏隆 訳
 魚の養殖最前線 隆島 史夫
 フグ“毒のなぞ”を追って 清水 潮
 血清アルブミン 青木 幸一郎 他
 プロスタグランジン物語 坂元 正一 他
 最新 医学大辞典 後藤 稔
 人体解剖カラーアトラス(改訂第2版)
 P.M.H.McMinn 他
 佐藤 達夫 訳
 からだの地図帳 高橋 長雄
 からだのしくみとはたらき 水谷 弘
 人体68の謎 豊川 裕之 他
 血液型と性格 大村 政男
 脳と行動 青木 清
 脳とコミュニケーション 岩田 誠
 脳と発達 津本 忠治
 脳と毒物 川合 述史
 睡眠の科学 鳥居 鎮夫
 脳ドリズム 川村 浩
 脳・神経系のエイジング 朝長 正徳 他
 人・社会・地球 半谷 高久
 ヒューマン バイオケミストリー
 C.R.Paterson 著
 村地 孝 監訳
 人間学 高島 博 原著
 ストレスに克つ生活術 菅原 明子
 メンタルヘルスハンドブック 同期舎出版
 色覚異常(改訂第2版) 深見 嘉一郎

色覚と色覚異常 太田 安雄 他
 臨床言語士になるために 日本聴能言語士協会
 女子教養の公衆衛生(改訂第2版) 三浦 梯二 他
 シンプル衛生公衆衛生学(改訂第3版)
 鈴木 庄亮 他
 公衆衛生学 武田 真太郎
 公衆衛生学 重松 逸造
 2000年のヘルスケア 野村総合研究所
 検証 医療事故 本田 勝紀 他
 1990ヘルスノート 熟年企画
 健康とライフスタイル(改訂版) 三井 淳蔵
 国民栄養の現状 平成2年版 厚生省
 血液型による親子鑑定 松本 秀雄

工 学(500)

ファジィ工学入門 本多 中二 他
 さんすい 石井 威望
 90年代のエネルギー 鈴木 篤之 他
 生体機能とデザイン 中尾 喜保 他
 自然堤防の諸類型 籠瀬 良明
 地球環境と人間 人類とエネルギー研究会
 重要文化財専修寺如来堂修理工事報告書1・2
 専修寺
 原子力の社会学 飯高 季雄
 平和国家日本の原子力 岸田 継之助
 放射能 見えない危険 草間 朋子
 誰も知らなかったソ連の原子力 中村 政雄 他
 原子力発電の話 竹内 栄次
 フロン 富永 健 他
 原子力 時代を先駆けた男達 吉川 秀夫
 レーザー化学 片岡 幹郎
 原爆はこうして開発された 山崎 正勝 他
 日本鋳山史の研究 小葉田 淳
 続 日本鋳山史の研究 小葉田 淳
 新版 繊維製品消費科学ハンドブック
 日本繊維製品消費科学会
 新しい組紐の世界 佐橋 慶
 松阪もめん覚え書 田畑 美穂
 わかりやすい絹の科学 間 和夫
 混合と成形 宮南 啓
 食品反応工学 久保田 清 他
 生命と食物 八木 一文
 ビールのうまささをさぐる キリンビール(株)編
 食品微生物学(改訂版) 木村 光
 ファッションビジネス基礎用語辞典
 パンタンデザイン研究所グループ
 アパレルの素材と製品 文化服装学院
 家政学・家庭科教育実践講座1~20,別巻
 家政学・家庭科教育実践講座刊行会
 暮しのり・デザイン 秋岡 芳夫

暮らしの知恵 篠田 統
 NHK家庭大工入門 宇野 英隆
 衣生活論 阿部 幸子 他
 新版 衣料消費科学 赤川 直亮 他
 衣生活学 樋口 ゆき子
 自立と選択の被服構成学 木岡 悦子
 着装と文化 斉藤 祥子
 新ファッションビジネス基礎用語辞典 織部企画
 衣服造形 杉井 あつみ
 衣服の科学 米田 幸雄
 身近な環境 衣生活の科学 吉田 敬一 他
 多サイズ展開のグレーディング 石丸 寿代
 洋裁 部分縫い 中屋 典子
 新編 被服材料学(改稿版) 古里 孝吉
 消費者のための被服材料 岩崎 芳枝
 被服の資源と被服材料 日本家政学会
 改訂 被服材料学 渡辺 綱夫
 衣生活管理論 榎並 英子
 現代被服整理学 宇野 虹児 他
 新衣服衛生学 米田 幸雄
 小物を縫う(上・下) 森 南海子
 日本の食生活全集10 群馬の食事 志田俊子 他
 日本の食生活全集21 岐阜の食事 森 基子 他
 日本の食生活全集36 徳島の食事 立石 一 他
 日本の食生活全集37 香川の食事 井上 タツ 他
 目で見る私たちの住まいと暮らし 中根 芳一

産 業 (600)

リゾート開発への警告

地域活性化大学 梶原 拓
 伝統産業論 磯部 喜一
 地場産業と地域経済 石倉 三雄
 世界コメ戦争 辻井 博
 農業経済地理 坂本 英夫
 土壌地理学 浅海 重夫 他
 新版 基本商業学 合力 栄
 貿易用語辞典(第3版) 上坂 西三 他
 伊勢商人の世界 後藤 隆之
 現代サービス産業の知識 清水 滋
 インダストリアルマーケティング戦略 浜田 芳樹
 インテリジェント物流

インテリジェント物流編

商流通学概論 山崎 仁
 国際物流のリスクと保険 加藤 修
 ジェトロ白書 1990年 貿易編 日本貿易振興会
 通商白書 総論 平成2年版 通商産業省
 通商白書 各論 平成2年版 通商産業省
 クレベルスベルク 交通心理学
 ディーター・クレベルスベルク 著

(000) 年 蓮花 一己 他訳
 観光学概論 小池 洋一 他
 電話100年小史 日本電信電話株式会社
 芸 術 (700)

キューロプスの窓 小町谷 朝生 他
 日本の美術 NO・290 澤村 仁
 NO・291 矢部 良明
 NO・292 関 秀夫
 NO・293 松本 包夫
 NO・294 木村 法光
 染める紡ぐ織る 寺前 祐子
 色彩の本 河原 英介
 運動処方 池上 晴夫
 小学校教育のための体育学概論 加賀谷 潔彦 他
 体育原理講義 中村 敏雄 他
 手の日本人 足の日本人 大塚 立志
 体育経営管理学講義 宇土 正彦 他
 エアロビクス・ウェイ

ケネス・H・クーバー

フィジカルフィットネス
 J・S・グリーンバーグ 他
 臨床スポーツ医学 井関 敏之 他
 フィットネス・ブック 健康・体力づくり事業財団
 スポーツは必要か 坂本 静男
 からだとところにエアロビクス 武井 正子
 目で見る動きの解剖学 ロルフ・ヴィルヘッド
 スーパー・ストレッチング ジョゼ・オスカー
 ストレッチングハンドブック

Hans Spring 他

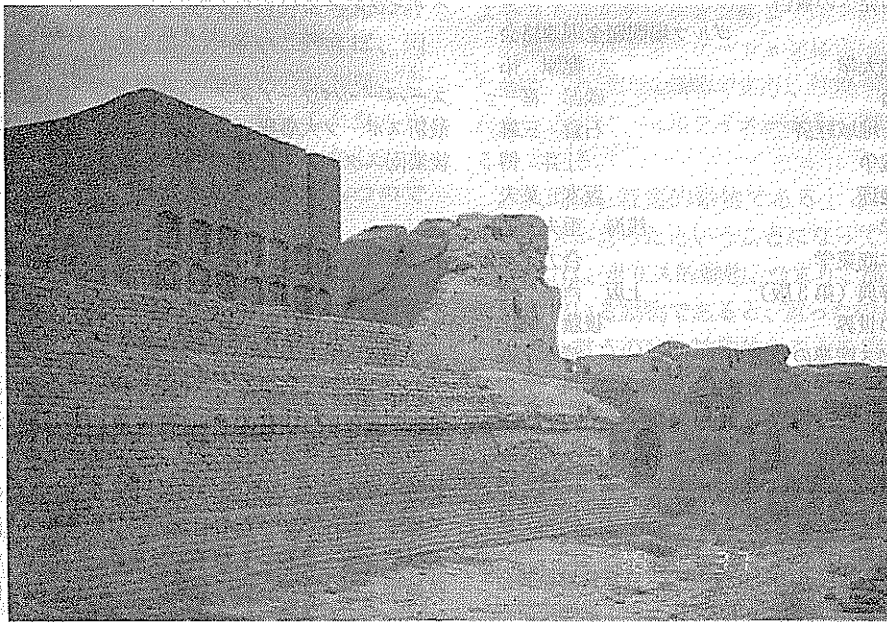
田嶋 幸三 訳
 スーパー・パワーアップ 安田 矩明
 最新スポーツ大事典 岸野 雄三
 後楽園スタジアム50年史 後楽園スタジアム

言 語 (800)

ことばの比較文明学 梅棹 忠夫
 手紙の書き方 これだけ知っていれば十分 浅見 大器
 英語の歴史 中尾 俊夫
 英検準1級・2級 口語英語表現辞典 小池 直己
 英検準1級・2級 レベルの英単語 小池 直己
 英検準1級・2級 英単語辞典 小池 直己
 英検準1級・2級 英熟語辞典 小池 直己
 時事英語の実例研究 小池 直己
 社会人のための英文経済記事の読み方 浦部 茂男

文学とは何か T・イーグルトン
大橋 洋一 訳
ガイドブック 現代文学理論 ラマーン・セルデン
栗原 裕 訳
「舞姫」への遠い旅 平岡 敏夫
座談によるプロレタリア文学案内 津田 孝 他
夏目漱石 伊豆 利彦
王朝の女流作家たち 樋口 芳麻呂他
終焉をめぐる 柄谷 行人
比較文学 日本文学研究資料刊行会
新歳時記(秋) 平井 照敏
現代の俳句の面白さ 飯田 龍太
この人のこの句 各界俳人三百句 金子 兜太
伊東静雄詩集 杉本 秀太郎
声でたのしむ美しい日本の詩 大岡 信 他
日本近代詩鑑賞 明治編 吉田 精一
日本近代詩鑑賞 大正編 吉田 精一
日本近代詩鑑賞 昭和編 吉田 精一
鄙歌 今井 貞吉
小説日本大学(上)(中) 大下 英治
フーシェ革命暦Ⅰ・Ⅱ 辻 邦生
文学部唯野教授 筒井 康隆
人類はいません 日高 敏隆
裸の県会議員 岸本 光造
ミュンヘンライヴ 子安 フミ
男ごころ 丸谷 オ一

すぎ去ればすべてなつかしい日々 永瀬 清子
追憶の1989年 高橋 源一郎
日本奥地紀行 イザベラ・バード
高梨 健吉 訳
東京ローズ ドウス 昌代
メメント・モリ 私の食道手術体験 後藤 明生
華の賦 榎山 和子
ナーンラム タイ言語図書協会
渦をのがれて 吉岡 みね子 訳
アラン・シリトー
レイモンド・カーヴァーの子供たち 山田 順子 訳
デボラ・スパーク
井上 一馬 訳
ぼくが生きるに必要なもの ドイツ現代詩抄
板倉 鞆音
文学と二十年代
ドイツ文学における歴史主義の克服
ロタール・ケーン
藤本 淳雄 他訳
父の国の母たち(上)(下)
女を軸にナチズムを読む クローディア・クーンズ
姫岡 とし子 訳
母と子のナチ強制収容所 シャルロット・ミュラー
星乃 治彦 訳
ピーアマンは歌う 野村 修
ロラン・バルト世界の解読 篠田 浩一郎
薔薇の名前(上)(下) ウンベルト・エーコ
河島 英昭 訳



写真は中国の新疆ウイグル自治区にて、18時30分頃に撮影

—田中欣治—